

<b>Title</b>	グローバリゼーション研究会報告
<b>Author(s)</b>	大木, 英夫 田中, 浩
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.43 別冊, 2009.1 : 107-115
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4026">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4026</a>
<b>Rights</b>	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## グローバリゼーション研究会報告

### 〈研究の概要〉

二〇〇一年の「国際寛容の日」（二月一六日）に寄せて、国際連合のコフィ・アナン事務総長は全世界を震撼させた九・一一米国同時多発テロ事件に引照しつつ、次のようなメッセージを送っている。「九月一日の恐るべき攻撃以来、世界はかつてないほどの結末を見出しています。多くの社会と文化を超えて、何百万という人々が、私たちはみな同じ人間という家族に属するのだという理解を再確認しました。これらの人々は、その悲しみと連帯において、私たちの共通の人間性を形作る共有の諸価値を表明したのです。こうした諸価値の一つが寛容です。この人権、多元主義およびデモクラシーの要石は、開放性、対話、理解および他者の尊重を表します。それは平和を可能にする価値なのです。……こうして、寛容の促進は、現在私たちが進めているテロに対する闘いの重要な部分です。それは、連帯、社会的正義および人権の尊重という共有の諸価値に基づくグローバルな共同体を創造しようとする私たちの目標の中心にあるのです（後略）」。

ここに表明される「グローバルな共同体」は、文化や国境を越えた二二世紀の理想的な世界秩序として提示されている。しかし、それを特徴付ける「人権」「寛容」「デモクラシー」「多元主義」等がおしなべて西洋近代、とりわけリベラリズムの政治文化の中で確立された諸価値であり、したがってその「共同体」への参加が必然的に「普遍的」と称さ

れる西洋的な文化と制度の受容を伴うことは留意されねばならない。グローバリゼーションがしばしば「文化帝国主義」の名の下に批判されるのはこのためであり、ここにリベラリズムを標榜する先進資本主義諸国に対する地域主義、民族主義的な反発が生じる所以がある。もとより、今日グローバリゼーションは貿易、投資、金融といった分野においてははや不可逆的な潮流となっており、世界経済の急速な進展を後押ししている。しかし、同時にこの流れが雇用問題や環境問題の深刻化、あるいは貧富の差の拡大を世界規模で現出させていることも事実であって、WTO、世界銀行、IMFへのNGOによる過激な抗議デモは、かかる経済分野においてすら楽観を許すものではないことを例証している。こうしてグローバリゼーションは、先のアナン・メツセージの「平和」の希求とは裏腹に、紛争や対立の契機を不断に生み出し続けているのである。

本研究は以上の点を踏まえたくうえで、グローバル化の時代における新しい世界秩序形成の諸条件を、政治・経済・文化の三つの位相において検討しようとするものである。そのために、本研究では、分析視角・対象として当面以下の四つの点を重視するものである。

#### ①文脈としての地球・国家・地域（地方）

今日「国民国家」の空洞化現象が叫ばれ、また今後いかにグローバル化が進展しようとも、国家は依然として世界秩序の重要な構成単位の一つとして存在しつづけるであろう。よって、グローバリゼーションは、従来の（i）中央―地方、（ii）国家間の関係としての国際関係、（iii）EUに代表される地域統合に加え、新たに地球という文脈を付与するものとして捉えることができる。この新しい文脈が従来の三つの文脈における政治・経済・文化のあり方にどのような変質をもたらすことになるのか。この点をエリアごとに実証レベルで研究することにより、グローバリゼーションの動態がいつそう鮮明になるであろう。

## ②主体としての「市民」

今日のグローバリゼーションの特質を究明するには、その人間的基礎、すなわち担い手の分析が不可欠となる。彼らが①で述べた四つの文脈において思考し活動する主体であるとすれば、彼らは地域住民や国民であるとともに、コスモポリタンとしての性格を併せ持つ。IT革命によるインターネットの発達と、NPO、NGOなどのヴォランティア・ソシエーションの目覚ましい拡充は、人々がコスモポリタンとしての活動を遂行する条件を、かつてなかった規模において急速に整備しつつある。今このような主体を仮に「市民」と総称するとすれば、そのネットワークとしての「市民社会」は、グローバリゼーションにおける重要なファクターとなるであろう。こうした今日の新しい「市民社会」のあり方を歴史的・思想的・実証的に分析することを、本研究では重要な検討課題と位置付けたい。

## ③多文化主義の視点

先にも述べたとおり、グローバリゼーションが西洋で生み出された文化や制度の地球規模での普及を意味する面が強いとすれば、そこに非西洋的な価値や文化を担う勢力との軋轢や衝突が生じることは避けがたい。ここに多文化の共存という視点が必要となる。近年アメリカ、カナダ、オーストラリアといった多民族からなる自由主義諸国では、少数民族（先住民・移民等）や女性に付された劣位を、従来からの権利保護ではなく、「多文化主義」という観点から擁護しようとする言説や運動が積極的に展開され、その一部が政府の政策として遂行されている。今後のグローバリゼーションの進展は、まさに地球規模で、多文化主義の視点の必要性を増大させていくことが予想される。ここで重要なのは、非西洋的な価値を担う諸民族が望むのは、単に彼らのへの法的保障や法の前の平等な扱いではなく、文化の差異性に深く根ざしたアイデンティティの「承認 (recognition)」にして「尊重 (respect)」だということである。この視点の周

到な検討なくして、グローバリゼーションは常に「文化帝国主義」に墮する可能性をもつと言えよう。

④リベラル・デモクラシーの意味と射程の再考

③で述べたことは、必然的に、西洋型リベラリズムが立脚する、「人権」「デモクラシー」「寛容」「多元主義」等の諸価値の真価を問うことに通じるはずである。言い換えれば、それは冒頭のアナン・メッセージに見られる「連帯、社会的正義および人権の尊重という共有の諸価値に基づくグローバルな共同体」の創造をいかにしてリベラル・デモクラシーが成し遂げ得るか、という問題である。個々の民族・文化のアイデンティティの尊重が、共同体全体の価値（共通善）へのおおのの積極的な貢献と不可分の関係にあるとすれば、「グローバルな共同体」の形成に際しては、そこにおける西洋的価値の優位が避けられぬにしても、それと非西洋的価値との「地平の融合」（ガダマー）の可能性が出来る限り模索されねばならない。つまり、「グローバルな共同体」は西洋的価値一色に塗りつぶされた「閉じた共同体」であつてはならず、常に外部に対して開かれ、異質な要素を「包括」（comprehension）ならぬ摂取することで、不断の再創造の可能性をもつたものでなくてはならないのである。こうした「グローバルな共同体」の理念を基礎付けることが、本研究の最終的な課題であると言つてよい。

本研究は以上の四つの点の究明を柱とするものである。これによつて、今日のグローバリゼーションの潮流を厳密に理解し、学会や論壇に対して積極的な提言を行つていく。また、可能であれば、本研究の成果を具体的な政策へと結実させていく方向を模索してみたい。

〈研究組織〉

田中 浩 聖学院大学大学院総合研究所特任教授・研究代表

大木 英夫 聖学院大学総合研究所・所長

阿久戸光晴 聖学院大学学長・教授

有賀 貞 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所・教授

千葉 眞 国際基督教大学・教授

田中 豊治 聖学院大学総合研究所・客員教授

近藤 勝彦 東京神学大学・教授

大澤 麦 首都大学東京都市教養学部・教授

速水 優 聖学院大学全学教授

康 仁徳 聖学院大学総合研究所・客員教授

真野 輝彦 聖学院大学大学院・総合研究所・特任教授

岩島 久夫 聖学院大学大学院政治政策学研究所・客員教授

富沢 賢治 聖学院大学大学院政治政策学研究所・教授

古屋 安雄 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所・教授

岡本 和彦 東京成徳大学人文学部・准教授

佐藤 義明 成蹊大学法学部・准教授

松尾 秀哉 聖学院大学総合研究所・准教授  
佐藤 貴史 聖学院大学総合研究所・特任研究員

〈研究活動〉

1. 研究会

第二期

(1) 二〇〇六年四月一〇日 「グローバルゼーションの文脈におけるハイデガー」【参加者二五名】

J・ヴァイス(カッセル大学教授)

(2) 二〇〇六年四月一七日 「グローバル化の時代における言語」【参加者二〇名】

田中 克彦(二橋大学名誉教授)

(3) 二〇〇六年五月一五日 「グローバルゼーションと「マルチチュード」」【参加者一六名】

田口富久治(名古屋大学名誉教授)

(4) 二〇〇六年六月五日 「ウェーバー学問(Wissenschaft)の『隠し味』」【参加者二〇名】

田中 豊治(聖学院大学総合研究所客員教授)

(5) 二〇〇六年七月一〇日 「国家間戦争の時代から新しい戦争の時代へ——グローバル化する世界における境界

(border)と秩序(order)——」【参加者一七名】

石田 淳(東京大学教養学部教授)

- (6) 二〇〇六年一〇月二日 「グローバル・ジャーナリズム」——その可能性と限界」【参加者二三名】  
 鈴木 弘貴（十文字学園女子大学社会情報学部助教）
- (7) 二〇〇六年二月二〇日 「グローバルゼーションとジェンダー関係の変容？」  
 ——家族・企業間関係の変動過程を中心に——」【参加者一七名】  
 木本喜美子（一橋大学大学院社会学研究科教授）
- (8) 二〇〇六年二月二一日 「グローバルゼーションとその内的・外的リスク——日本の場合」【参加者一七名】  
 グレン・フック（シエフィールド大学教授）
- (9) 二〇〇七年一月二五日 「EUという名の帝国——グローバル化と欧州統合のもとでの国家性の変容」  
 【参加者一九名】  
 中村 健吾（大阪市立大学教授）
- (10) 二〇〇七年二月一九日 「一九五五年体制・再考」【参加者二一名】  
 升味準之助（東京都立大学名誉教授）
- (11) 二〇〇七年四月一六日 「グローバルゼーション下の『過去の清算』——フランスに見る法の役割とその限界——」【参加者二四名】  
 樋口 陽一（東京大学名誉教授）
- (12) 二〇〇七年五月二二日 「グローバルズムとリージョナリズムの相克——近代日本の挑戦と挫折——」  
 【参加者二三名】  
 山室 信一（京都大学教授）
- (13) 二〇〇七年六月二一日 「グローバル化とプラネタリー化——知識共同体の形成に向けて——」【参加者二五名】



(14) 二〇〇七年七月九日 矢澤修次郎（二橋大学名誉教授・成城大学教授）  
「グローバルゼーションとメディア」【参加者一八名】

山本 武利（早稲田大学教授）

(15) 二〇〇七年一〇月一五日 「外交の新時代——少子高齢化社会と不戦構造——」【参加者一六名】

猪口 邦子（衆議院議員）

(16) 二〇〇七年一月二日 「グローバル時代における福祉ガバナンス——脱『格差社会』の可能性——」

【参加者二〇名】

宮本 太郎（北海道大学大学院教授）

(17) 二〇〇七年二月三日 「イスラーム復興とグローバル化する国際社会」【参加者二三名】

小杉 泰（京都大学大学院教授）

(18) 二〇〇八年二月二六日 「最近の中国情勢について」【参加者一八名】

国分 良成（慶応大学教授）

(19) 二〇〇八年三月三日 「戦後保守政治の構造とその再編成？ グローバリゼーションと二つの『改革』」

【参加者一七名】

渡辺 治（一橋大学大学院社会学研究科・社会学部教授）

(20) 二〇〇八年四月一四日 「タウヒードを参照軸としてみるグローバリゼーション」【参加者二五名】

板垣 雄三（東京大学東洋文化研究所名誉教授）

(21) 二〇〇八年五月一九日 「市民自治に込める地方分権改革とは何か」【参加者二四名】

新藤 宗幸（千葉大学教授）

- (22) 二〇〇八年六月九日 「二つのロシア」【参加者一九名】  
下斗米伸夫（法政大学教授）
- (23) 二〇〇八年七月二三日 「国際貢献」論と集団的自衛権【参加者一九名】  
豊下 栢彦（関西学院大学教授）
- (24) 二〇〇八年一〇月六日 「東アジアの出版人たちと語り合う」【参加者二〇名】  
小島 潔（岩波書店『思想』編集担当）
- (25) 二〇〇八年十一月一四日 「岐路に立つオランダの福祉国家」【参加者一七名】  
廣瀬真理子（東海大学教授）
- (26) 二〇〇八年十二月一八日 「中国における民主主義改革派の登場とその思想」【参加者二〇名】  
小島 晋治（東京大学名誉教授）
- (27) 二〇〇九年一月一九日 「グローバル下、日本が直面する食料・農業問題」【参加者二〇名】  
暉峻 修三（元東京教育大学教授、農業農協問題研究所前理事長）
- (28) 二〇〇九年二月九日 「グローバル化経済とケインズ経済学」【参加者一六名】  
浅野 栄一（中央大学名誉教授）